

アメリカ労働運動と CO との関係

—1960年代における UFW の成功事例から—

伊藤 大一

はじめに

現在、全労連に加盟している労働組合によって注目されている手法がある。それがアメリカで発達したコミュニティ・オーガナイズング（以下、COとする）であり、労働組合運動に活性化をもたらす手法として注目されている。COを取り入れた活動として、大阪府関係職員労働組合（以下、大阪府職労とする）の保健師増員キャンペーンがある。このキャンペーンは、コロナ禍のもと、保健所機能向上のために各保健所に保健師1名と事務職員1名の増員を求めたキャンペーンであり、増員に成功することになった。

この大阪府職労によるキャンペーンは、労働組合に敵対的な府政のもとで、COの手法を取り入れ、広範囲な市民との連携のもと、画期的な成果をもたらした。このキャンペーンは、COの手法採用のみでなく、社会運動的労働運動（Social Movement Unionism 以下、SMUとする）の萌芽として評価できよう。

SMUとは、1995年 AFL-CIO 会長選挙で改革派のスウィニーの勝利によって注目を集めた労働運動の潮流である。SMUは、従来の白人・中間階級・男性の既得権益を維持するビジネス・ユニオニズムの潮流を批判して、女性・非正規・マイノリティの労働者組織化を重視し、社会正

義の実現など労働運動の目的の再定義を目指す点に特徴を有している（鈴木 [2005]）。このように、アメリカ労働運動の潮流の中に、労働運動再活性化を目指す潮流があり、その潮流によって採用されている組合活性化手法がCOであると言える。

ただ、一方でCOがアメリカで発達した組織化手法であることから、その有効性に疑問を感じる活動家がいることも事実である。そこで、本稿は、現在注目を集めているCOの出発点、アメリカ労働組合との関係、とくにUFW（全米農業労働者組合）でのCOの活用事例を報告したい。

結論を先に述べると、COは戦前にアメリカの労働組合CIO（産業別会議）の組織活動に刺激を受けて、労働運動で採用されていた手法を地域コミュニティ組織化に応用し、誕生した手法である。ただ、戦後CIOはAFLと合併し、AFL-CIO（アメリカ労働総同盟・産業別労働組合会議）となった。AFL-CIOは保守化し、白人・中間層・男性の利益確保を中心とする労働運動、ビジネス・ユニオニズムへの指向を強め、ベトナム反戦運動や公民権運動と距離をとり、場合によっては敵対的な関係となった。そのため、AFL-CIOとCOも疎遠となった、その例外がCOのオルガナイザー、セサール・チャベスに率いられたUFWの運動であった。本稿では、この内容について詳しく、展開したい。

1 COの出発点とアメリカ労働組合運動の関係

COとは何か、と説明するのは非常に困難である。なぜならば、COは地域コミュニティ組織化手法であり、多民族国家、移民社会アメリカを背景として生み出された手法だからである。さらに、COは、政治活動をせずに地域の貧困問題等の社会問題のみに取り組む「流派」、社会福祉の分野で発達した「流派」など、様々な方向に発達し多様化している。

現在、全労連に採用されている「流派」は、コミュニティ・オーガナイズング・ジャパン（以下、COJ）により日本社会に紹介された。この流派は、UFWの幹部であったマーシャル・ガンツに起源を持つ。ガンツは、2023年現在、ハーバード大学ケネディ大学院でリーダーシップ論を教えており、2008年のアメリカ大統領選挙でオバマ陣営の選挙活動に、COを導入したことから、日本でもCOが知られるようになった。遠藤他 [2012] は、COと労働組合との相違を次のように述べている。

「このモデル（COのこと－筆者注）は、アクターを労働組合に限定しない。コミュニティを基盤として、労働者とその家族、地域住民、企業経営者をアクターとする。アクター間の利害調整の内容は、労働条件に留まらず、雇用創出、住環境、職業訓練、人権、教育問題など地域を取り巻くさまざまな問題を包括する。……（中略）……コミュニティ・オーガナイザーに求められる重要な能力は、その地域の大多数の人の参加を促すことができる人物を見いだしてリーダーとなるよう説

得することにある。目指す組織は中央主権型の全国組織でなく、地域に根ざしたボトムアップ型の小規模なものである」（遠藤他 [2012]、pp.51 - 52）。

そもそもCOは、1930年代にアメリカ・シカゴで、ソール・アリンスキーによって作られた（遠藤・筒井・山崎 [2012]）。そして、1940年にアリンスキーは、COを用いて地域コミュニティ問題を解決する組織として、またCOを広める組織として工業地域振興事業団（以下、IAFとする）を設立した。注目を集めたIAFによるCOの戦術としてウェザーズ [2010] は、「IAF傘下の団体は、スト、ピケ、ボイコット、座り込み等、労働団体が使う戦術をコミュニティ活動の場に適用するのがうまいので評判になった」（pp.196 - 7）と述べている。

このように、アリンスキーは、労働組合の戦術を地域コミュニティ組織化に応用してCOを作りだした。アリンスキーが影響を受けた労働組合は、AFL-CIOを形成するCIOであった。ここで、AFL-CIOの歴史を簡単に書いておこう。

1886年に、印刷工組合、葉巻製造工組合、鋳型工組合、大工組合などを中心としてAFLが結成された。AFLの特徴は、熟練労働者中心の職能組合の連合として誕生した。いまから約150年前であり、日本は明治19年であった。当時は機械工業も未発達であり、機械の性能でなく、職人の能力・熟練に依拠して生産をおこなっていた。そのため、熟練労働者の交渉力は強く、この交渉力を背景に、AFLは団体交渉を通して労働条件向上をめざしていた。AFLはこのように熟練工の労働条件維持・向上を目的にしていたために、非熟練工や黒人、女性については組合加盟を認めなかったり、加入させたとしても

熟練工よりも一段低い位置に位置づけたりするなど差別的な態度をとった（長沼 [2004]）。

しかし、20世紀になり、資本主義の発展にともない、機械の性能も向上し、これまでのように職人の熟練に依拠することなく、未熟練労働者を雇用することで、生産を実施できるようになった。その象徴がGMに代表される自動車産業である。このような変化に対応して、熟練労働者を中心とした職能組合でなく、その産業で働く未熟練労働者を組織しようとする産業別労働組合への志向がAFL内で明確となりはじめた。

この対立が1935年に表面化し、自動車、ラジオ、アルミ産業の各労働組合により、ジョン・ルイスを中心としてCIOがAFL内において結成された。この動きに対してAFLはCIOに解散を命じ、翌36年にAFLはCIOを事実上追放し、AFLとCIOに分裂することになった（正式にCIOが組織として発足するのは1938年）。同時に、1935年はルーズベルト大統領によって、ワグナー法が制定された年であった。このワグナー法によって、アメリカ労働組合には労働三権が保障されることになった。

このCIOを一躍有名にしたのが1936年のGMフリント工場でおこなわれたUAW（全米自動車労働組合）のシットダウン・ストライキである。CIO加盟のUAWはこのストライキに勝利し、GMに労働組合を認めさせた。このシットダウン・ストライキの意義は、イギリスの熟練労働者組合が行うウォーク・アウトと呼ばれるストライキの形態と比較するとよくわかる。工場などから職人達が立ち去り、生産を止める形態のストライキがウォーク・アウトとよばれる。熟練労働者が立ち去ったあと、彼らの技能に依存していた工場は生産を続けられなくなる。

このように熟練労働者の技能を前提におこなわれるストライキが、ウォーク・アウトと呼ばれる（熊沢 [2013]）。

しかし、資本主義の発達によって、機械の性能が向上し、熟練労働者でなく、未熟練労働者でも生産ができるようになると、このウォーク・アウトは効力を失ってくる。なぜならば、工場にスト破りの未熟練労働者（代替労働者）を導入し、生産が続行されるためである。当然、ストライキに参加した労働者は解雇の憂き目に遭う。そこで編み出されたのが機械の近く、生産ラインに座り込むシットダウン・ストライキであった。これは生産ライン、大規模になると、工場全体に「籠城」して、生産を止めるとともに、スト破りの労働者導入を阻止するストライキの形態である。

1936年GMフリント工場のストライキは、86日間にわたって工場を封鎖して、GMに労働組合との団体交渉を迫った。もちろん、この間、食料などの援助物資がCIOやストライキ労働者家族の援助のもと工場内に運び込まれた。GMは、GMに雇われた警備隊や警察などに依頼して、労働者を工場から強制的に排除しようと試みたが、強行するとGMのフリント工場に火災などの被害発生のおそれ実行できなかった。州知事の仲介もあり、ついにGMはUAWを交渉相手と認め、団体交渉の席に着いた。この勝利が、UAW、そしてCIOの名を一躍有名にした。

資本主義社会の発展による機械の発展、それに合わせた熟練の解体、そして、未熟練労働者の労働条件向上の要求を背景にしてCIOは発展してきた。未熟練労働者の運動は、熟練に依拠できないために、ストライキ、ピケ、ボイコットなど広く聴衆に訴える戦術を採用した。これ

らの戦術を参考に、労働運動でなく、地域の貧困問題解消などに応用したのがCOの出発点であった。

COを生み出したアリンスキーは、CIOから労働組合の戦術を学びCOをつくったが、なぜ、アリンスキーは労働組合でなく、COという地域コミュニティを組織するという手法を必要としたのか。この点について、石神 [2021]によると、アリンスキーは「労働者が仮に賃上げに成功したとしても、家賃や食費、医療費の高騰と引き換えならば、それは意味がない」と考えたとしている（石神 [2021]、p.51）。

つまり、アリンスキーはアメリカ、シカゴという都市を念頭に置いた場合、問題の本質を低賃金などの労働問題でなく、カソリック、プロテスタント、白人、黒人、アイルランド系、イタリア系、東欧系など様々なバックグラウンドを持ち、同じグループ同士で集住し、対立し、相互不信で、お互い連絡を取ろうとしない、地域コミュニティのあり方に問題の本質を認めたと見えよう。そのために貧困問題など共通の課題を解決するために、異質な人々同士をつなぎ合わせ、一つの大きな「力（Power）」にするためにCOという手法、そしてオルガナイザー集団を育成しようとした。このような理由から、アリンスキーは労働運動でなく、COとそのオルガナイザー集団育成のためにIAFを作り、社会問題解決を図ろうとした。

このように、COはCIOの運動に刺激を受け生み出された。このためCOとCIOに代表されるアメリカ労働運動は密接な関連を有していたと言えよう。しかし、戦後、アメリカ労働運動とCOとの関係は疎遠な関係に変化していく。その変化に関係するのがワグナー法を修正した1947年のタフト・ハートリー法である。ワグ

ナー法が労働組合に寛容過ぎていると主張する共和党などを中心として、トルーマン大統領の拒否権を乗り越えて成立した法律である。このタフト・ハートリー法によって、ワグナー法は修正され、これまでなかった使用者でなく労働組合の不当労働行為の新設や労働組合幹部に「共産主義者でない」ことを宣誓させるなど、反労働組合的な内容であった。

さらに、戦後、冷戦の開始により、反共主義的な動向は強まり、その影響の中、CIOは共産主義的とみなした全米電気ラジオ機械工労働組合など複数の組合を1948年にCIOから追放した。このように未熟練労働者を組織化する革新的な労働組合の連合として生まれたCIOは、徐々にそのみずみずしさを失っていった。

そして、1955年に、CIOはAFLと合併し、AFL-CIOが成立した。AFL-CIOの成立によって未熟練労働者組織化によって注目を集めたCIOの先進性は失われ、白人・男性・中流階級の権利を守るビジネス・ユニオニズム潮流が強まることになった。特に、1960年代には、AFL-CIOは公民権運動やベトナム反戦運動に敵対的な態度をとるようになり、保守化し、そのため、COとの関係も疎遠となることになった。

2 COを用いたUFWの成功事例

このように、アメリカの労働組合運動とCOは戦後疎遠な関係となった。その例外がCOのオルガナイザーでもあったセザール・チャベスによって率いられたUFWの運動であった（吉木 [2014]）。なお、UFWは何度か名称を変更しているが煩雑となるために、本稿ではUFWで統一する。

1927年にメキシコ系移民農業労働者の両親か

ら生まれたチャベスは、1952年にアリンスキーによって設立されたCSO（コミュニティサービ
ス組織）に加わり、COの手法を身につけた。
CSOはカリフォルニア州でメキシコ系コミュニ
ティを組織化し、有権者登録、貧困対策などを
おこなっていた。しかし、1962年にチャベスは
メキシコ系農業労働者の組合結成に特化するべ
きだと主張し、CSOを去り、カリフォルニア州
デラノでUFWを設立した。

カリフォルニア州では、多くの労働者が農業
に従事している。しかし、農業労働者は収穫
や種まきの時のみに集中して労働に従事する
季節労働者であり、さらに中国系、日系、フィ
リピン系、メキシコ系など多くの移民労働者達
からなり、労働組合の組織化が非常に困難で
あった。AFL-CIOは1959年に傘下の労働組合
AWOC（農業労働者組織化委員会）に多額の組
織化資金を提供して農業労働者の組織化を命じ
た。

しかし、農業労働者の組織化に成功したの
は、AFL-CIOからの支援を受けたAWOCでな
く、独立系で財政力にとほしいUFWであった。
UFWは1965年から66年にかけて生食用ブド
ウ農園を対象に全米の主要都市でボイコット（不
買運動）を展開し、さらにワイン用ブドウ農園
を所有していた大手酒造企業であるシェンリー
社をボイコット対象に加えた。そして1966年
シェンリー社との間で団体交渉を経て、労働協
約締結に成功した。UFWはこの成功を皮切り
に、次々と農業労働者を使用している企業と労
働協約の締結に成功し、農業労働者の組織化に
成功した。この事態を受けて、AFL-CIOは同年
UFW主導のもとにAWOCを合併させ、UFW
をAFL-CIOの労働組合として承認した。さら
にUFWは1975年にカリフォルニア農業労働関

係法を成立させ、アメリカではじめて農業労働
者労働組合に対する法的な保護を与えることに
成功した（中川 [1997]、黒田 [2000]）。

なぜ、豊富な組織化資金を持ったAWOCで
なく、独立系で財政力に乏しいUFWが農業労働
者の組織化に成功したのであろうか、その
背景にCOはどのように関係していたのであろ
うか。この問いに答える論文が当時のUFW幹
部であるマーシャル・ガンツによって書かれた
Ganz [2000]である。「資源と多様な対抗策：
1959年から1966年におけるカリフォルニア農
業労働者組織化における戦略的能力」と題され
たガンツの論文によると、AWOCは白人農業労働
者中心の組織化を目指した一方で、UFWは
カソリックやプロテスタントなど宗教団体、学
生団体、キング牧師に代表される公民権運動と
連携し、SMUとしてメキシコ系農業労働者の組
織化に成功したとする。

AWOCはフィリピン系農業労働者を多く組織
していた労働組合であったが、会長は白人男性
であり、組織化の主要なターゲットを白人男性
農業季節労働者にしていた。そもそも、カリフォル
ニア農業労働者の中で白人労働者は少数派で
あり、さらにAWOCはメキシコ系労働者を、ス
ト破りと見なし脅迫と暴力を用いた。その結果、
AWOCのオルグが逮捕・収監され、AWOCに
対して罰金が科される事態となった。このよう
にAWOCによる組織化は進まなかった。

一方、メキシコ系農業労働者を組織する
UFWにとっても、ストライキによって広大な農
地全体をピケット・ラインで封鎖し、スト破り
労働者を就労させない、ということは不可能で
あった。そこで、UFWは全米の主要都市で、
生食用ブドウおよびシェンリー社製品のボイ
コット（不買運動）を展開した。UFWは全米

各地にボイコットの呼びかけをおこなったときに、農業労働者ばかりでなく、SNCC（学生非暴力調整委員会）の協力のもと学生ボランティアも各地に派遣しボイコットの呼びかけた。各主要都市では、カソリック、プロテスタントなどの宗教団体のネットワークを利用することで各宗教組織が受け入れに協力した。

そしてUFWの運動に最も大きな影響を与えた連携先がキング牧師に率いられた公民権運動であった。差別され劣悪な処遇を強制されている黒人達の地位向上を求めるのが公民権運動ならば、差別され劣悪な処遇を強制されているメキシコ系農業労働者の地位向上を求めるのがUFWの運動である、との構図をUFWは作り上げることに成功した。UFWの運動は、単にメキシコ系農業労働者の処遇改善を求める運動でなく、宗教団体、学生団体そして公民権運動との連携によって社会正義を求める運動として展開したのであった。

その象徴が1966年3月から4月にかけておこなわれたカリフォルニア州デラーノから州都サクラメントまでの行進である。これは前年3月にアラバマ州セルマから州都モントゴメリーまで行進した公民権運動のセルマ大行進にそのイメージを重ね合わせていた。社会正義を掲げる社会運動と対立し企業の評判を落とすことをおそれたシェンリー社は、この行進の最中、UFWと交渉に入ることを表明し、1966年6月にUFWとシェンリー社の間で労働協約が締結された。この後、UFWが他の企業と労働協約を次々締結していくことは先に述べたとおりである。

このようにUFWの運動は、ベトナム反戦運動や公民権運動から距離をとり、白人・中間階級の組織化に熱心なビジネス・ユニオニズム路

線を強めていたAFL-CIOの中で例外的な運動であった。この背景には、チャベス自身メキシコ系労働者であったこともあるが、その組織化手法に他団体との連携を重視し運動を展開するCOの影響が認められる。しかし、その後、1980年代前半にはチャベスは変質し、有能なオルグをUFWから次々追放した。ただこのとき、UFWの運動の経験とCOのノウハウを身につけた多数のオルグが、SEIUやHERE（現在はUnite Here!）に移籍し、SEIUやHEREによるSMU実践に影響を与えた（ウェザーズ [2010]）。

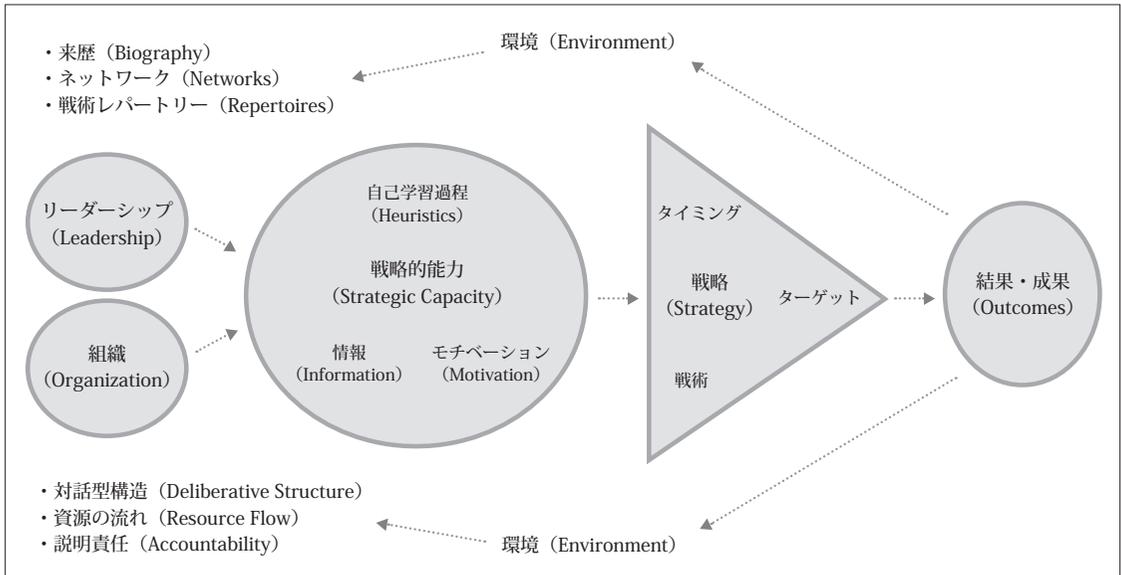
ガンツもこのときにUFWを離れ、ハーバード大学に戻り、2022年現在ハーバード大学ケネディ・スクール（公共政策大学院）で上級講師としてCOを用いたリーダーシップ論・組織化理論を教えている。このGanzのもとで、COを学んだ鎌田によってCOJは設立された（鎌田 [2020]）。

3 マーシャル・ガンツによるCOの枠組み

以上がUFWの組織化の過程であるが、ガンツの論文には、このUFWの組織化におけるより抽象的な、分析的フレームワークについて述べられており、戦略過程モデルとしてモデル化している（図表）。この戦略過程モデルについて最後に述べたい。ガンツの念頭には、なぜ、資金も豊富なAWOCが組織化に失敗する一方で、UFWは成功したのか、両者の戦略を分けたのはなにか、という問題意識がある。

端的に、このモデルの結論を述べると次のようになる。多様性を持った「リーダーシップ」と「組織」を根源として、運動組織内に「戦略的能力」が培われる。この戦略的能力をもとに、

図表 ガンツの戦略的過程モデル



出所：Ganz[2000], p.1006 より。

このキャンペーンにおいて適切な「戦略」が立案され実施される。そのキャンペーンの「結果・成果」が生まれ、「環境」に変化が生じる。変化した環境からリーダーシップと組織に影響し、その両者に変化が生まれる。この循環である。戦略、戦略的能力、そしてリーダーシップ、組織の順でより詳しく説明すると次のようになる。

この図表のモデルにおける結果・成果 (Outcomes) を生み出す戦略 (Strategy) としてガンツは次のように述べている。「戦略とは、わたしたちの資源を、目的を実現するための力 (the power) に造り替えることで、どのようにして、わたしたちが持つものを、わたしたちが必要とするものに、変化させるかである。…… (中略) ……戦略とは、ターゲティング (targeting)、タイミング (timing)、戦術 (tactics) についての特定の選択を一つの方向へと『まとめ上げる』 (framing) ことである」 (Ganz [2000], p.1010)。このように、ガンツは戦略を、いま持っている資源を活用し、要求を

実現する力に変えることであり、具体的には、何を対象にし (ターゲティング)、効果的なタイミングで、どのような方法で (戦術)、この3つを包括的に勘案し戦略を実施することで要求実現するとしている。

さらに、効果的な戦略を生み出す背景として、戦略的能力 (Strategic Capacity) を指摘している。この戦略的能力は、情報 (Information)、自己学習過程 (Heuristics)、モチベーション (Motivation) からなる。情報とは、諸問題に対応してきた解決策のことであり、これが豊富にあるほど、安易に諸問題に対応出来る。自己学習過程 (Heuristics) とは、これまでにない新しい問題に直面したときに、リーダー達によって導き出される新しい解決策作成過程のことである。前例のない事態に対して、リーダー達は状況を創造的に分析し、これまでの対応策 (情報) も活用しながら新しい対応策を導き出す。モチベーションは創造的アウトプットに対して必要不可欠なものである。また、動機付けられ

た（モチベートされた）活動家は必要な知識や技能の獲得に対して、そうでない人々よりも、より貪欲である。さらに、成功するリーダーシップを持ったチームは時間がたつにつれて、より良い結果を出す理由は、成功こそが、組織全体のモチベーションそのものを高めるためである。この3要因により、戦略的能力は構成されている。

ガンツは戦略的能力を生み出す要因としてリーダーシップと組織（Organization）の2要因を挙げている、さらにリーダーシップの構成要因として来歴（Biography）、ネットワーク（Networks）、戦術レパートリー（Repertoires）を指摘し、組織の構成要素として、対話型構造（Deliberative Structure）、資源の流れ（Resource Flow）、説明責任（Accountability）を指摘している。

ガンツは戦略的能力を生み出すリーダーシップを個人による決定でなく、指導者チーム全体の相互作用によって発生するものと捉えている。そのために来歴（Biography）とは、ジェンダー、宗教、世代など多様なバックグラウンドを持った人々の相互作用を意味している。さらに多様な背景を持った指導者チームのもつ、様々な社会的ネットワークの活用、様々な戦術レパートリーの多様性を強調している。具体的に述べると、AWOCのリーダーは白人男性達であり、そのネットワークもまた彼らの持つ戦術レパートリーも限定的なもので、経験主義的なもので、創造的なものでなかった。

一方、UFWにおいて、チャベスはメキシコ系アメリカ人であり、ガンツはユダヤ系アメリカ人であるなど、人種的多様性もあり、チャベス自身COのオルガナイザーであり、労働組合出身でないなど、UFWの指導者チームは多様

性をもっていた。さらに、公民権運動とのネットワークを構築し、公民権運動の戦術レパートリーをUFWの運動に応用して成功を収めた。

戦略的能力を生み出す組織（Organization）とは、対話型構造、資源の流れ、説明責任からなる。対話型構造とは、上意下達の官僚的な組織構造でなく、組織の多様性を尊重して、様々なメンバーとコミュニケーションをとり、意見を吸い上げる構造のことである。この対話型構造を持つ組織は、官僚的な組織よりも、より革新的な戦略を生み出すことができるとしている。資源の流れとは、資金だけでなく、人的ネットワークを含めた様々な資源を利用できる組織の仕組みのことである。さらに、ガンツは、資金に依拠した決定よりも、人に依拠した決定の方が、より戦略的能力を向上させると指摘している。説明責任はリーダーや指導者チームの選出方法に関わることで、官僚的でなく、民主的なプロセスでリーダーを選出することである。

ガンツの認識の枠組みを示している図表をまとめると、組織の多様性を根拠にして、多様なメンバーの持つ人的ネットワークなどの資源を活用することが最も重要視されている。言い換えると、いま現在持っている資源を見つけ出し、それを活用し、要求を実現する「力（the power）」に変えるといえよう。それがこの図表では、リーダーや指導者チームの属性としてリーダーシップと、制度化された組織形態としての組織に分けられ、このリーダーシップと組織が原動力となり、戦略的能力を生み出す。この戦略的能力は、情報（Information）、自己学習過程（Heuristics）、モチベーション（Motivation）に媒介され、具体的な戦略（Strategy）となり、タイミング、ターゲットそして戦術を加味し、戦略は実行に移される。実行された戦略は、な

んらかの結果 (Outcomes) を生み出し、その結果を総括し、結果によって生じた変化に対応して、また新たな循環が始まる。ガンツは、運動の戦略の策定と実行を以上のようなイメージで持っているようである。

おわりに

本論で明らかにしたことは次の3点である。

第1に、COの成立とアメリカ労働運動の関係である。COは戦前、未熟練労働者を組織しようとしていたCIOの戦術に刺激を受けて、その手法を地域コミュニティ組織化に応用することから誕生した。このように、COはアメリカ労働運動から生まれた組織化手法であった。しかし、戦後、AFL-CIOの成立にみるように、アメリカ労働運動は保守化し、公民権運動、ベトナム反戦運動と敵対的な関係になり、COとの関係も疎遠となった。

第2に、例外的に、1960年代に、COとアメリカ労働運動の成功事例がUFWによる農業労働者組織化の事例である。

カリフォルニアでメキシコ系農業労働者組織化に取り組んだUFWはCOを労働組合運動に組み込み、キング牧師に代表される公民権運動をはじめとして、社会運動と連携して大きな成果を上げた。

第3に、UFWの運動を総括したガンツのCOの抽象的な枠組みを示した。ガンツは、成功する組織と成功しない組織を比較し、成功する組織の根底に多様性とそれを活用とするリーダー層の意識的とりくみと、それを保障する制度的組織の存在を指摘する。この両者は、戦略的能力を経て、具体的な戦略として実施される。このようにガンツはCOを用いた組織の成功の根底に多様性とその活用を強調している。日本の労働組合運動を振り返ってみても、女性や若者の意見を組合活動に反映させる「意識」だけでなく、制度的保障など参考になる点が多数あると言えよう。

(いとう たいち・大阪経済大学准教授、
労働総研理事)

【参考文献】

- ・石神圭子 [2021] 『ソール・アリンズキーとデモクラシーの挑戦』北海道大学出版会
- ・ウェザーズ、C. [2010] (前田尚作訳) 『アメリカの労働組合運動』昭和堂
- ・遠藤公嗣・筒井美紀・山崎憲 [2012] 『仕事と暮らしを取りもどす』岩波書店
- ・遠藤公嗣他 [2012] 『アメリカの新しい労働組織とそのネットワーク』労働政策研究・研修機構
- ・鎌田華乃子 [2020] 『コミュニティ・オーガナイズング』英治出版
- ・Ganz, M. [2000] "Resources and Resourcefulness: Strategic Capacity in the Unionization of California Agriculture, 1959-1966", *American Journal of Sociology* 105 (4) pp.1003-1062
- ・熊沢誠 [2013] 『労働組合運動とはなにか』岩波書店
- ・黒田悦子 [2000] 「メキシコ系アメリカ人と労働運動」五十嵐武士編『アメリカの多民族体制』東京大学出版会
- ・鈴木玲 [2005] 「社会運動的労働運動とは何か」『大原社会問題研究所雑誌』No.562・563、pp.1-16
- ・長沼秀世 [2004] 『アメリカの社会運動—CIO史の研究』彩流社
- ・中川正紀 [1997] 「『農業労働関係法』の制定を求めた農業労働者の闘い」『札幌学院大学人文学会紀要』第60号、pp.237-260
- ・吉木双葉 [2014] 「米国カリフォルニア州におけるセサル・チャベス主導の農業労働者運動」『ラテンアメリカ研究年報』No.34、pp.65-98